様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３１８９

研究課題名（和文）比較授業分析によるペダゴジカル・コレクトネスの解明と構築

研究課題名（英文）Conceptualization of Pedagogical Correctness through a Comparative Lesson Analysis

研究代表者
サルカルアラニ　モハメドレザ（Sarkar Arani, Mohammad Reza）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：３０５３５６９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、国際比較授業分析という研究手法を通して、授業の文化的構造を解明し、ペタゴジカル・コレクトネスの概念を解明することであった。具体的に、授業分析を通して、現場教師と研究者の授業の分析視点や評価基準（レンズ）の違いがどこにあり、それはなぜ生じるのか。現場教師の中にもレンズの違いが見られるが、どの点に違いがあって、それらの違いはなぜ生じるのか。研究者間にも違いが見られるが、それらはどのような違いがあって、それらの違いはなぜ生じるのか、その一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine lessons practices through a comparative analysis for conceptualizing pedagogical correctness and clarify connection of pedagogical and professional correctness in practice. Emphasis is here placed on why different correctness will be accrued among educators, researchers and practitioners in the same education context. Comparative lesson analysis and meta-analysis as a qualitative research method was employed for data collection. The findings are intended to clarify the significant influence that comparative lesson analysis has exerted on expanding research for improving and studying pedagogical correctness based on the specific and analytical perspectives of different lenses among practitioners, social scientists, and educational philosopher and researchers.

研究分野：社会科学

キーワード：ペタゴジー　ペタゴジカル・コレクトネス　比較授業分析　授業の文化的スクリプト　授業研究

１．研究開始当初の背景

授業実践の記録・分析・省察と教師同士の協働を特色とする日本型授業研究が、海外に紹介されて約15 年経過し、世界的な広がりをみせている。このことは、実践的な力量向上と授業改善への期待の現れと評価できよう。その一方、学校の現状に目を転じれば、授業研究が形骸化し、個々の教師の力量や、組織としての学校の教育力の向上につながらないという問題点も指摘されている（Day & Gu 2010, 2014; Feiman-Nemser 2012)。特に、一見すると「教師中心」から「学習者中心」に力点が移動したかに見える授業も、活動レベルでの生徒の参加に留まり、教師主導の知識伝達に陥っているケースも多い。教師の授業観（theory）や授業方法(methods & tools)が変わったとしても、ティーチングそのものの質が必ずしも変わるとはいえない（Hiebert & Morris 2012)。服従ではなく納得の学び、教師の独占的な教授ではなく生徒の協同的な学びへとシフトする（paradigm shift in learning）ことが求められる。教室とは将来社会の原型であり、授業実践学（ペダゴジー）はよりよい社会の構築や持続可能性に対しても大きな責務を担っている。それは具体的に、授業改善やカリキュラム改革において、何を変え（教育対策・カリキュラム方針)、何を守るべきか（教室の雰囲気・学校文化）の根拠に位置づけられる。変動する社会における教育の思想（context)、教授‐学習の目的・内容・方法・評価を融合するペダゴジーの構築（culture)、community としての個人と社会（人間)、ローカルとグローバル（空間)、問題と展望（時間）の統一的把握を試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は、国際比較授業分析という研究手法を通して、授業の文化的構造（cultural script of teaching）を解明し、ペタゴジカル・コレクトネス（pedagogical correctness）の概念（内包と外延）を解明することである。

本研究では、ペダゴジーを教育の思想と方法の融合による授業実践学としてとらえ、特にペダゴジーがよりよい社会の構築やその持続可能性に貢献するための文化的な役割・影響・働きを、ペダゴジカル・コレクトネスととらえる。これは、実践が進むべき方針（何が正しいか）についての暗黙的に構成された信念の集合として特徴づけられ、学校、カリキュラム、授業などに広範に影響していると仮定できる。ただし、文化的スクリプトとして授業実践の深層に埋め込まれており、直接的に意識し抽出することは困難である。そこで、微視的な授業分析と、構造的な比較研究のアプローチを採用する。

２－１．研究の課題

本研究では、比較授業分析にもとづくペダゴジーの再構築という全体構想の中で、特にペダゴジカル・コレクトネスの概念の内包と外延を解明することを目的とし、以下の課題に取り組む。

❶これまでの申請者らの比較授業分析を発展させ、比較教育学の知見を得て、新たな研究手法（comparative as a lens）の開発を行なう。

❷海外（特に東アジア）において比較授業分析を実施し、授業実践の深層に潜在している文化的スクリプト（ティーチング・スクリプト）を明らかにし、文化的構造を解明する。

❸比較授業分析の知見をペダゴジーの観点から一般化し、教育の思想と方法の文化的基底の様相と機能を解明する。

❹文化の固有性や差異を重視しつつ、文化を越えて参照可能な知見（cross cultural learning）を導出する。

❺以上を総合して、具体の事実からコレクトネス（正しさや望ましさ）の概念を構成し、授業研究、学習デザイン研究に新たな地平を開こうとし、ペダゴジカル・コレクトネスの概念構造を解明し、内包と外延を明確にする。

２－２．研究の意義

本研究では、以下の２つの理由によってペダゴジカル・コレクトネスに着目する。

第１は、文化を越えた教師の学びの可能性である。日本の授業研究が世界に広がるにつれ、国を越えて互いの授業研究の成果から学ぶことができる可能性が広がってきた。また、授業改善や教師教育においては、文脈に根ざした具体的な事実にもとづく研究活動による実践の改善、専門職としての同僚性にもとづく組織学習による教師の成長など、世界共通の課題が認識されている。授業研究や教師教育に関する国際交流も活発になっている。しかしながら、互いの実践から学びあうといっても、教育実践とは文化的な影響が大きく、単純な長短の比較や知見の移転はできない。また、教育実践の相違を文化の相違に還元するだけでは、表面的には相互理解のように見えるが、互いの学びにいたらない。実践において何が望ましいのか、何を改善するか、何を守るかを判断するには、実践の評価基準が必要となる。その根拠をもたらす概念として、本研究ではペダゴジカル・コレクトネスに着目する。

第２は、教師の専門職像である。教師論に関する研究動向を大きく捉えれば、「教える人としての教師」だけではなく、「支える人としての教師」や「人間としての教師」へと教師像の移行あるいは拡大がなされてきた。しかし、最近の動きとして、再度「教えること」の原点に立ち返り、「教える人としての教師」の再評価と再構成が行われるようになってきた。それは教えるということ(teaching)は、専門職(teaching as a professional practice）であることはもちろんのこと、社会正義を実現することを使命とする（teaching as a social justice mission）動きである（McDonald et al. 2013; Ritchie 2012)。つまり、教育実践上の価値判断は、学習成果だけでなく、社会正義の実現への寄与からなされる必要がある。ペダゴジカル・コレクトネスの概念は、教師の専門職像において問い直される必要がある（サルカール アラニ 2014:114)。これを実現することが、世界各国の教師教育や授業研究の課題になってきた。こうした新たなグローバル・プロブレムに対して、どのようなソリューションが可能であるかが、今日最も重要な教育学研究上の研究課題であるといえる。これは以前の科研（基盤研究(C)授業の文化的スクリプトに関する国際比較研究‐2012 年度～2014 年度‐）から見えてきた課題であり、これを本研究と関連付ける。

3. 研究の方法

国際比較授業分析という研究手法の特徴は、研究者１人による分析・メタ分析や検討によって授業を分析するという従来の方式だけではなく、小・中・高校の教師と大学の研究者の目（レンズ）すなわち、授業分析・検討会という協働的な授業研究の場を設けたことである。つまり、若手・ベテラン教師・研究者が同じ場に集合し、授業記録を読み、授業のビデオを見た上で、事実（エビデンス）に基づく感想・意見・批評などを率直に述べ合い、討論する。その手順は、次の通りである。①授業を観察・記録し、トランスクリプトを作成する。②同国（文化）で分析し、③トランスクリプトを交換し、他国（異文化）でも分析

する。④同一授業に対する他国（異文化）の分析結果を比較する。⑤個々の文化的実践の固有性を考慮して、典型化や平均化によるのではなく、異質性の交流によって、授業の文化的構造を明らかにする。

本研究では、ペダゴジカル・コレクトネスの解明に迫るために、その研究手法の大幅な改善を図る。特に、授業分析・検討会の参加者に対して、適切な分析視点やツールを提供し、授業の状況に根ざした考察(situational considerations)や、文化の深層への気づき（cultural awareness）を生むようにする。そして、明示 evident – 暗示 implicit – 潜在 potential と漸進的に事実を深く捉えられるようにする。

４．研究成果

４－１．【ペダゴジカル・コレクトネスの解明のための国際比較授業分析】

授業を改善するためには、新しい理論(theory)を理解しただけでも、新しい方法(method)や手法(tools)を手に入れただけでも、それは困難である。理論と方法・手法を結びつけるアプローチ(approach)と、そのアプローチが有効に機能する文化的要因が鍵を握っている。しかし、アプローチや文化的要因は、多くの場合隠れており自覚することが難しい。スティグラーとヒーバートが指摘したように、「教室で何が起こることの大部分は、文化的コードによって決定される。それはいくつかの点で、教えることの DNA のような機能である。それが教師を変えても自動的に授業の変化が生じるわけではないことの理由である」(Stigler & Hiebert 2009:12)。そして、こうした文化的なコードを、ティーチング・スクリプトと呼んでいる。ティーチング・スクリプト、すなわち授業の文化的スクリプトとは、人々が一つの文化内において共有している授業に関する心象、価値観や習慣化された行動様式及びそれらの相互関連の集合体である（サルカール アラニ, 2014)。１つの文化の中にあるスクリプトは、その文化にいる人々にとっては自明である（渡部 2016, 2018; サルカールアラニ・柴田 2014)。自明視されることは、省察によっても語られない。それゆえ省察にもたらされる知見は、個人やローカルなコミュニティ（学校や研究グループ等）の内だけで通用することになり、外に開かれていかない。ローカルに気づくことができない授業の文化的構造に気づく（redefine meaning）ために、比較研究の方法を採用し、国際比較授業分析を実施する（Watanabe, Sarkar Arani and Shibata, 2017)。

研究者らが提案する＜比較＞の概念は、これまでの比較研究の主流におけるそれとは異なる。すなわち、ある国や文化に共通した特徴を明らかにすることには、本研究は重心をおいておらず、平均像、典型例を求めるために比較研究を行うのではない。むしろ、異質性の交流による顕在化という比較研究のアプローチをとる。異なる文化背景を有する教育研究者や教師の目から、他国の実践を分析することによって、実践に隠れた意味（コード）の構造（スクリプト）を顕在化させることを企図している。すなわち、異なる文化的背景を有する者のレンズを通すことによって、自明である文化的コードを抽出することが可能となり、さらに考察（討論）を通して文化的スクリプトを明らかにすることができる（Sarkar Arani, et al. 2017; Watanabe, Sarkar Arani and Shibata 2017; サルカール アラニ・柴田 2013; サルカール アラニ・柴田 2014; サルカール アラニ 2014）

４－２．【専門職独自の“レンズ”の深み】

本研究では、国内の専門性の異なる５人（現場の熟練教師２名と研究者３名）が同じ授業実践をどのように分析・評価するか、その分析視点や評価基準の違いやそれらの根拠となる授業観・教科観等の世界観の違いが明らかにすることによって、授業分析者の分析・評価のメタ分析・再解釈を試みることをねらいとしている（ちなみに本研究は、国際比較授業分析ではないが、文化の異なる集団または個人間の比較という点で、問題意識を同じとする研究である）（渡部,2016 を参照)。なお本研究では、こうした教師の授業実践の分析視点・評価基準の根拠のことをペダゴジカル・コレクトネスと呼んでいる。ペダゴジカル・コレクトネスは、授業分析者の置かれている状況・文脈・文化に大きく左右されながら彼らの中に形成されてきたもので（サルカール アラニ・柴田 2015; 渡部 2016)、彼らはたいていの場合、立場、見方・考え方、評価基準、改善の方向性など（例：accountability の着想、responsibility の発想、morality の思想)、自らのペダゴジカル・コレクトネスに無自覚である。専門性の異なる５人（実践家の２名と研究者の３名‐社会科学者１名と教科教育学者 2 名‐）の組み合わせから、以下の３つの違いを考察する（表１を参照)。

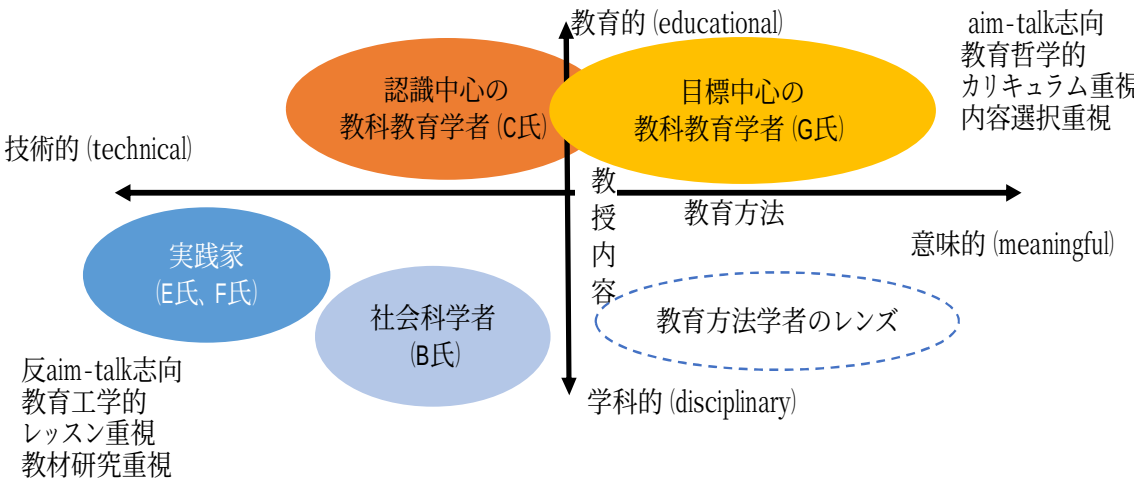
①現場教師と研究者の授業の分析視点や評価基準（レンズ）の違いがどこにあり、それはなぜ生じるのか。
②現場教師の中にもレンズの違いが見られるが、どの点に違いがあって、それらの違いはなぜ生じるのか。
③研究者間にも違いが見られるが、それらはどのような違いがあって、それらの違いはなぜ生じるのか（図１を参照）（渡部 2018)。

表１　分析対象の５人の授業を観察する際のレンズ

モデル／レンズ	実践家		社会科学者（B 氏）	認識中心の教科教育学者（C 氏）	目標中心の教科教育学者（G 氏）
	未熟（F 氏）	熟練（E 氏）			
授業を見る視点	点的 気になった箇所をランダムに取り上げる	構造的 本時の流れ（構造）を整理する	構造的 本時の流れ（構造）を整理する	構造的 本時の流れ（構造）について単元計画を踏まえて整理する	構造的 本時の流れ（構造）について単元計画を踏まえて整理する
授業分析の単位	本時のみ	本時のみ	本時のみ	本時と単元	本時と単元・カリキュラム全体
評価または批判の対象	①教材研究 ②教育技術	①教材研究 ②教育技術	①教材研究・教材選択	①本時・本単元のねらいと教授内容（知識の種類）（この議論の延長で教育方法）	①教育技術 ②本時・単元のねらいと授業方法・教授内容（教材選択）

評価基準	①教材内容の正確さと知的な面白さ ②子どもの現実（子どもが授業を好意的に受け止めているか否か）	①教材内容の知的な面白さ ②子どもの現実（子どもの発言や態度の事実）	①教材内容の正確さと知的な面白さ	①教授内容の知識の種類	①子どもの現実（子どもの発言や態度の事実） ②民主的国家社会の形成者育成という教科目標
分析的問い	①内容は正確か授業を子どもは好意的に受け止めたのか ②教育技術は授業をスムーズに進めるのに効果的だったのか	①内容は子どもに理解されたのか ②授業は子どもの学びの意欲を喚起したのか ③教育技術や教育方法・教授内容は教師のねらいを達成するのに効果的であったか	①内容は正確か ②内容は子どもに興味深いか ③何を教えるのか焦点が絞れているか	①教授内容や教育方法は教師のねらいを達成するのに効果的であったか ②教授内容は社会を解釈するのに役立つか（転移可能な概念的知識か）	①教育技術や教育方法・教授内容は教師のねらいを達成するのに効果的であったか ②授業は民主的国家社会の形成者育成に寄与する内容や考え方を提供したか
改善ポイント	なし	教育技術	教材研究・教材選択	授業のねらい、教授内容（知識の種類）（この議論の延長で教育方法）	教育技術 授業・単元のねらいと教育方法・教授内容（教材選択）

（渡部・柴田・サルカール アラニ 2016）



（Watanabe, Sarkar Arani & Shibata 2017）

図１　分析対象の５人の授業分析者のレンズの位置関係

４－３.【間違いの許容 - learning errors & classroom climate regarding mistakes -】

本研究によると、海外の小・中・高校の授業過程では、教師は教室では「間違ってもよい」と何度も発言し、実際に間違った答えを全体の場で発表する生徒も多い。自ら積極的に挙手した場合にも、間違えるケースが観察される。日本の学校とくに高校の授業に比べると、海外の授業では、失敗の「リスク」が低く、「家庭的スクリプト」の影響があるといえる。また、自ら進んで思考し表現しようとする主体性が尊重されている点で、「主体的・個別的・構成主義的スクリプト」も協調的に作用しているといえる。しかし、間違った答えに対しては、教師はその理由を解説したり、生徒らに考えさせたりすることなく、正しい解答の提示で終わってしまうことがしばしば見られる。日本の教師・研究者の立場すなわちレンズやペダゴジカル・コレクトネスからすると、思考や理解を深める好機を逸しているように映る。授業中の生徒の間違いには、単なるミスとは違い必然的・蓋然的な理由が存在することも多く、それを新たな問題と位置づけ学級全体で追究することにより、個々の生徒の学習内容の理解・納得を深化させたり、生徒相互の協同的な学びを促進させたりできる。しかし、海外の授業事例では、間違いから学ぶということが十分にはなされていない。この点については、日本でも課題になっている「主体的・個別的・構成主義的スクリプト」や「協力的・集団的・社会的相互作用的スクリプト」の影響が少ないためと判断される（サルカール アラニ・柴田 2014，2015）。

国際比較授業分析の結果を手がかりにして、学習者の＜誤り（errors）＞に対する教師の対応を中心にしながら、海外と日本の授業に見られる文化的スクリプトを、①誤りのコストと教師の態度、②誤りの捉え

方・正す方法、③途中の操作などの間違いに自ら気付くのが、共同の学ぶ機会として誤りを生かす対策、⑤誤りの過程（思考の過程）の議論・理解の発展の視点から明らかにすることができる。教師は「誤り」を奨励しながら、その「誤り」から「理解」の定着や深化を図っていない。ただし、「理解」を重視していないわけではなく、教師が学習課題における記号による表記と、それに対応する領域の図示を関連づけて理解できるような工夫がなされていた。時間通りに授業を進めることを教師は重視し、「理解」を重視しながらも、十分にそのための手立てをうつことができていない。ここでは、授業を計画的に進めなければならないという、「制度的スクリプト」と、一人ひとりの理解を重視する「主体的、個別的、構成主義的スクリプト」が競合していたと考えられる。海外の授業事例のメタ分析や日本との比較授業分析からは、間違いが許容され、安心して参加できる雰囲気が保証されている点では、ペダゴジカル・コレクトネスが保たれているといえるが、生徒の応答に対して、教師や仲間からの再応答がなされないままである点には、プロフェッショナル・コレクトネス（professional correctness）が担保されてないといえる。このように相対的な概念（内包と外延）としてコレクトネス（ペダゴジカルとプロフェッショナルの両面）を検討していく必要がある（Sarkar Arani, et al., 2017)。

４－４．【今後の研究課題】

比較授業分析によってそれを考察する道筋を示した。前述した通り、Lasley(1993)はペダゴジカル・コレクトネスの概念を批判している。それに代わる概念としては、プロフェッショナル・コレクトネスを提示している。すなわち、ペダゴジカル・コレクトネスが教師の科学的な判断を阻害し、ドグマとして「正しい」とされていることを過度に単純化して実践に適用されようとしていることを戒めている。本研究も、プロフェッショナル・コレクトネスを重視する立場には変わらないが、Lasley(1993)が、ペダゴジカルなるものを、いつでもどこでも変わらず通用するテクニックのような硬直したものとして捉え批判したのに対し、本研究では、ペダゴジーを文化的相対性の中で捉え直し、専門職である教師の高度な判断（teacher agency）や、研究者の議論の過程の中で生まれ変容する動的な概念として捉えている。

本研究においては、現場教師（若手教師・熟練教師ほか）と研究者（教科内容専門・教育方法学者・教育哲学者ほか）の授業実践の分析視点や評価基準などを分析対象としてメタ分析・再解釈を行った。このような成果を踏まえて、新たに発見した今後の研究については、このような視野からペダゴジーを捉え直しながら（例：listening pedagogy, dialogic teaching, culturally accessing pedagogies, culturally responsive teaching)、国際比較授業分析を通してプロフェッショナル・コレクトネスを新たなレンズ（内包と外延）で明らかにしていくことが課題となる。

今後の研究課題は、こうした概念化や構造化の合理性を検証するために、国内外の事例を用いて比較授業研究のアプローチにより分析し、実践者と研究者がそれぞれの立場において見方・考え方、評価基準、改善の方向性（例：accountability の着想、responsibility の発想、morality の思想）などにおけるペダゴジカル・コレクトネスとプロフェッショナル・コレクトネスを明らかにすることである。

<u>参考文献</u>

Day, C. & Gu, Q. (2014). Resilient Teachers, resilient Schools: Building and Sustaining Quality in Testing Times, London: Routledge.

Day, C. & Gu, Q. (2010). *The New Lives of Teachers*, London: Routledge.

Dyches, J. & Boyd, A. (2017). Foregrounding Equity in Teacher Education: Toward a Model of Social Justice Pedagogical and Content Knowledge, *Journal of Teacher Education*, Vol. 68, No.5, pp. 476-490

Feiman-Nemser, S. (2012). *Teachers as Learners*, Cambridge: Harvard Education Press.

Hiebert, J. & Morris, A.K. 2012. Teaching, Rather Than Teachers, As a Path toward Improving Classroom Instruction. *Journal of Teacher Education,* Vol.63, No.2, pp.92-102.

Gay, G. (2010). *Culturally Responsive Teaching: Theory, Research, and Practice* (2nd edition), New York: Teachers College Press.

Giroux, H. A. (1990). Schooling and the Struggle for Public Life: Critical Pedagogy in the Modern Age. *The Personalist Forum*, Vol.6, No.1, pp.91-93.

Kress, T.M. (2011).*Critical Praxis Research: Breathing New Life into Research Methods for Teachers*, London: Springer.

Kuhan, D. (2015).Thinking Together and Alone, *Educational Researcher*, Vol.44, No.1, pp.46-53.

Lasley, T.J. (1993).Rx for Pedagogical Correctness: Professional Correctness, *The Clearing House*, Vol.67, No.2, pp.77-79.

McDonald, M.; Kazemi, E. & Kavanagh, S.S. 2013. Core Practices and Pedagogies of Teacher Education: A call for a Common Language and Collective Activity. *Journal of Teacher Education*, Vol.64, No.59, pp.378-386.

McMillan, J. H. (2018). *Using Students' Assessment Mistakes and Learning Deficits to Enhance Motivation and Learning*, New York: Routledge.

Morris, A.K. & Hiebert, J. (2011). Creating Shared Instructional Products: An Alternative Approach to Improving Teaching. *Educational Researcher,* Vol.40, No.1, pp.5-14.

Ritchie, S. (2012).Incubating and Sustaining: How Teacher Network Enable and Support Social Justice Education. *Journal of Teacher Education*, Vol. 63, No.2, pp.120-131.

Sarkar Arani, M.R., Shibata, Y., Sakamoto, M., Iksan, Z., HaziahAmirullah, A., and Lander, B. (2017). How Teachers Respond to Students' Mistakes in Lessons: A Cross-cultural Analysis of a Mathematics Lesson. *International Journal for Lesson and learning Studies*, Vol.6, No.3, pp.249-267.

サルカール アラニ モハメッド レザ (2014).「授業研究のグローバル化とローカル化」日本教育方法学会　編『教育方法 43』東京 図書文化,106-119 頁.

サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田好章(2014).「授業の文化的スクリプトの複合的構造の解明−比較授業分析を通して−」『日本カリキュラム学会第 25 回大会』関西大学, 2014 年 6 月 28 日-29 日。

サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田好章(2013).「比較授業分析による授業の文化的スクリプトの解明−文化複合からの考察−」『日本カリキュラム学会第 24 回大会』上越教育大学, 2013 年 7 月 6 日-7 日

柴田好章 (2007).「教育学研究における知的生産としての授業分析の可能性」教育学研究,第 74 巻第 2 号,189-202 頁。

Stigler, J.W. & Hiebert, J. (2009).*The Teaching Gap: Best Ideas from the World's Teachers for Improving Education in the Classroom, update with a new preface and afterword*, New York: The Free Press.

Thomas, G. (2012).Changing Our Landscape of Inquiry for a New Science of Education, *Harvard Educational Review*, Vol.82 No.1, pp.26-51.

渡部竜也 (2018).「我が国の教育者の授業分析に見られるコレクトネス-教科教育学と教育法との交通整理-」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅱ 第 69 集,13-28 頁。

渡部竜也 (2016).「我が国のベテラン社会科教師の授業分析に見られるコレクトネス：教育者・ベテラン教師 7 人の授業批判に見られる分析視点の違いから」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅱ 第 67 集,1-34 頁。

Watanabe, T., Sarkar Arani, M. R., and Shibata, Y. (2017). Professional and Pedagogical Correctness through a Japanese Social Studies Lesson: Focus on Comparison as a Lens. *11th World Association of Lesson Studies International Conference*, Nagoya University, Nagoya, 24-26 November, 2017.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

1) 渡部竜也（2018）.「我が国の教育者の授業分析に見られるコレクトネス-教科教育学と教育法との交通整理-」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅱ 第69集,13-28頁。（日本語）（査読無）

2)Sarkar Arani, M.R., Shibata, Y., Sakamoto, M., Iksan, Z., HaziahAmirullah, A., and Lander, B. (2017). How Teachers Respond to Students' Mistakes in Lessons: A Cross-cultural Analysis of a Mathematics Lesson. *International Journal for Lesson and learning Studies*, 6(3), 249-267. （英語）（査読有）

3) Cheon, Ho-seong, Sarkar Arani, M. R., Shibata, Y., and Sakamoto, M. (2017). Towards Possibility and Prospect of Cross-cultural Lesson Analysis-Focus on Methodology of Comparison as Lens-. *Korean Journal of the Japan Education*, 22(1), 107-125. （韓国語）（査読有）

4) 水野正朗（2017）.「学びが深まるアクティブ・ラーニングの授業設計：教え合いから学び合いへ」『学校教育研究』第32号, 177-182頁。（公開シンポジウムでの発言をまとめ直したもの）（査読無）

5) 渡部竜也（2016）.「我が国のベテラン社会科教師の授業分析に見られるコレクトネス：教育者・ベテラン教師 7 人の授業批判に見られる分析視点の違いから」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅱ 第67集,1-34頁。（日本語）（査読無）

6) Moghaddam, A., Sarkar Arani, M.R., and Kuno, H. (2015). A Collaborative Inquiry to promote Pedagogical Knowledge of Mathematics in Practice, *Issues in Educational Research*, Vol.25, No.2, pp.170-186.（英語）（査読有）

〔学会発表〕（計９件）

1) Watanabe, T., Sarkar Arani, M. R., and Shibata, Y. (2017). Professional and Pedagogical Correctness through a Japanese Social Studies Lesson: Focus on Comparison as a Lens. *11th World Association of Lesson Studies International Conference*, Nagoya University, Nagoya, 24-26 November, 2017.（英語）

2) 渡部竜也・柴田好章・サルカール アラニ モハメッド レザ（2016）「授業分析にみるペダゴジカル・コレクトネスの解明-専門職独自の“レンズ”の深み-」『日本カリキュラム学会　第27回』香川大学大会　2016年7月2日-3日。（日本語）

3) Sarkar Arani, M. R. (2016). “Back to Pedagogy”, *Hamshahri Online*, 23 April 2016, pp.1-5. Available online at: http://hamshahrionline.ir/details/331545/Society/highereducation （ペルシャ語）

4) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Dialogic Teaching and Active Learning across Cultures: Comparing Oral and Literal Teaching Traditions”, *XVI World Congress of Comparative Education Societies*, Beijing Normal University, Beijing, China, 22-26 August, 2016.（英語）

5) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Research on Teaching and Learning: Approaches, Challenge, and Prospects”, *14 Annual Conference of Iranian Curriculum Studies Association*, Bu Ali Sina University, Hamedan, Iran, 31 August-1 September, 2016.（ペルシャ語）

6) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Research on Teaching and Learning: Approaches, Challenge, and Prospects”, *14 Annual Conference of Iranian Curriculum Studies Association*, Bu Ali Sina University, Hamedan, Iran, 31 August-1 September, 2016. （ペルシャ語）

7) サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田好章（2015）「授業の文化的スクリプトの構造にもとづくペダゴジカル・コレクトネスの考察－国際比較授業分析を通して－」『日本カリキュラム学会　第26回大会プログラム』昭和女子大学　2015年7月4日－5日。（日本語）

8) サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田好章（2015）「授業実践の文化的基底の解明のための比較授業分析の方法論」『日本教育方法学会　第51回大会プログラム』岩手大学 2015年10月10日-11日。（日本語）

9) Sarkar Arani, M.R. (2015), Lesson Study in Teacher Education Curriculum, *First National Conference of Teacher Education*, Farhangiyan University, Tehran, Iran, 4 May, 2015. As Keynote Speaker. （ペルシャ語）

〔図書〕（計１件）

1) Sarkar Arani, M.R.(2017). *Lesson Study: A Global Solution for Improving Teaching and Enhancing Learning*, Sixth Edition (Revised Third Edition), Meraat Publisher, Tehran. Iran. 総頁数352。(The New Edition Part1)（ペルシャ語）

〔分担執筆〕（計３件）

1) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Preface”, in M. Naseri et al., *The Desire for Learning: Life and Educational Thoughts of Mohammad Reza Sarkar Arani*, Offset Publisher, Tehran, pp.9-13. （ペルシャ語）

2) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Looking for Morality and Spirituality in Moral Education”, in M. Hasani, *An Alternative Approach in Moral Education*, Madrese Publisher, Tehran, pp.417-427. （ペルシャ語）

3) Sarkar Arani, M.R. (2015), “Preface”, in Y. Ishikawa, *Japanese Teacher as a Leader*, Meraat Publisher, Tehran. IR., pp.13-16. （ペルシャ語）

そのた

〔国際研究集会〕（計１件）

1) Sarkar Arani, M.R. (2016). “Private Schools in Japan: Potential, Parameters and Prospects”, *Islamic Network of Women Scientists*, Tehran, Iran, 1 September, 2016. （ペルシャ語）

６．研究組織

(1)研究代表者：サルカル アラニ　モハメド レザ（Sarkar Arani Mohammad Reza）名古屋大学　大学院教育発達科学研究科　教授（研究者番号：30535696）

(2)研究分担者：渡部竜也（Watanabe Tatsuya）東京学芸大学　教育学部　准教授（研究分担者：10401449）

(3)研究分担者：柴田好章（Shibata Yoshiaki）名古屋大学　大学院教育発達科学研究科　教授（研究者番号：70293272）

(4)研究分担者：水野正朗　（Mizuno Masao）東海学園大学　スポーツ健康科学部 准教授（研究者番号：40738217）

(5)研究分担者：坂本篤史　（Sakamoto Atsushi）福島大学　人間発達文化学類 准教授（研究者番号：30632137）